「積木くずし」の講演に反響

子どもの非行について聴衆者の感想は…

六月二十二日午後、社会福祉センターで、俳優穂積隆信氏を迎えての講演会が開かれました。

市ＰＴＡ連合会（久万男治会長）主催で、青少年の非行問題について市民総ぐるみで考え合おう、と企画されたものです。

会場は、子どもの教育・非行問題に関心のある父母などでいっぱいで、穂積氏の体験談「積木くずし・親と子の二百日戦争」と題する話に、多くの人が共鳴していました。

このほど、この講演を聞かれたかたから「感想文」が寄せられましたので紹介します。

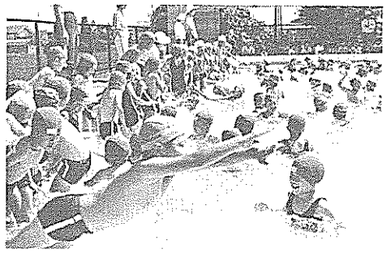
穂積さんの講演を聞いて

去る五月二十二日、社会福祉センターで穂積さんの講演を聞かせていただきました。

ご自分が身を持って体験されたことだけに説得力があり、随分、考えさせられることばかりでした。

日常の会話で、子どもの気持ちをよく考えてやらずに、大人本位の物の言い方をしたり、その場の成り行きで、（例えば、夫婦で言い争った後など）子どもには全く関係がないのに、つい感情にまかせて声を荒立ててしまったりして、結局、子どもの心を傷つけてしまってはいないか。

子どもの良い面には口をつぐんでしまい、悪いことばかりに口やかましく注意してしまうことはないか。…等々、思い当るふしが、そこここにあって、反省することばかりでした。



そして、どんな子どもでも、初めから「悪い子」なのではなくて、みんなそれぞれに可能性を秘めているのであって、それを良くするのも、悪くするのも、大人（親）なのだということです。

また、不幸にして横道にそれたときは、親が真正面から取り組んでいって直さなければいけない、と強調されていました。他人に預けてたとえ直ったとしても、本質的に全く違うのだということです。

我が子を思うにまかせてしかり、親の考えを一方的に押しつけてしまっている自分を反省しながら、聞かせてもらいました。

このような気持ちが、たとえ一週間でも続いてくれたら、と願いつつ帰途についたことでした。

稲吉　下田町子

わたしは、積木くずしの本もテレビドラマも見ないまま、この講演を聞くことになりました。

わたしたちに今一番関心があり、身近な問題である非行、一口に非行といってもいろいろなことが引き金になり、また、さまざまな対処の仕方があり、つくづく難しい問題だと考えさせられました。

穂積さんの話の内容は、ご自分の経験を基に、いかなる状態になろうとも、家族が愛情を持って接して立ち直らせる、というものでした。

わたしなりに積木に置き替えて解釈し、思ったことは、子どもは生まれながらにして積木（知識、経験、好奇心など）を積み上げていく立派な土台を持ってこの世に誕生し、いろいろな形、色の積木を選びながら一つ一つ積んでいっている様に思います。成長の間に間違った積木を積み上げて、崩れる時もあるでしょう。でも、その失敗を恐れることより、崩れた時、自分自身の判断力で正しい積木を選び、積み通せる強く、たくましい精神力を身につけさせたいと思います。

他人の積木だけは倒さないように、家族一同がしっかり見守り合いながら、心やさしい、人を思いやる人間になってほしいと思います。

これは、あくまでもわたしの理想ですが、一歩でも近づく努力はおしみません。

城陸　Ｙ・Ｓ

中学入学と同時に、子どもが言うことを聞かなくなったと思った。

「息子は、親の思い通りになるようではだめだ。親離れしているのだ」と、自分に言い聞かせながらも、親の思い通りにしようとする事ばかりでした。

自分の子どもを悪くしようと思って、しかったりする親はいないと思います。でも、そのしかり方が問題なのですね。

穂積先生のおっしゃる通りのしかり方、結果もおっしゃる通り、悪い手本の見本のようなものです。

親自身、子どもがそのまま親になったようなものですから、ひどいものです。「ちらかすばかりで、ちょっとは片付けなさいや」としかりながら、親もきちんと出来ていないのにしかる資格はないな…と。しかりかけたものの、やめる訳にもいかず、この説得力のなさ。

注意の仕方一つで、子どもの態度も違います。ダイミング、言葉、そして親自身の生活態度、生きざまです。

子どもの言い分を一度は受け止め、それからゆっくり言い聞かす、そんな心のゆとりがほしいものです。子どもを導いて行くには、大人が磨かれていなければなりません。

家庭が基本ですが、学校にあっては、先生と生徒は親子の関係であってほしいものです。

あるカレンダーの「しかるより手本を示す親の愛」という言葉が思い出されました。戸塚ヨットスクールの件で「子どもを入任せにするな」と話されたとき、子どもの病気、非行は親の心、生活の間違い、親の責任と教えられてきましたが、息子がぜんそくで、年間五十日も休んだときは精神的にも疲れ、入院通学を考えました。悩みましたが、ここで入院させたら親としての責任を放棄することになる。自分が治してやらなければと思いました。

あのとき、入院させていたら子どもを切り捨てたことになり、一生悔やまれていたと思い「これでよかったんだなあ」と、数年前を思い出していました。

悲しいかな、なかなか良い親になれません。さいさい、良いお話という"刺激剤"を与えてもらって、少しでも親が教育されなければならないと、またまた反省のひとときでした。

領石　北村よしえ

六月二十二日午後――。

会場いっぱいのお母さんがたは、何かを求めて集まっていただいたのだろう。

静かな語りかけには、実体験を持つ人の真実があった。ある時は疲れ果てていた穂積さんであったろうに、今は娘さんとの愛の再会に表情は晴れて、慈愛にあふれて見えた。

子どもの崩壊を救う道は、親自らが変るより方法はない。愛によって立直った子どもほど強いものはないとの体験からのお話は、いつとはなしに会場を共鳴させていった。

あるお母さんは涙していた。我が子に思いをはせ、心に染みるものがあったのだろうか。

次の日、苦しみ抜いているお母さんから「うちの子も立直るかも知れません。今、やっと勇気が湧いてきました」と、こんな話もうかがうことができました。

蔦ケ池中教諭　西森善郎

一輪車に夢中

奈路小学校

一輪車を上手に乗る子どもたち

国道三二号、根曳峠の登り口から西へ入って約四㌔、山の斜面に建つ奈路小学校（川久保一郎校長）は、児童二十一人、複式学級で授業が行われている小さな学校です。そして校舎に入ると、生徒の誰からも"あいさつ"が返ってくるさわやかな学校です。

今、この学校では、昨年から取り入れた一輪車が、一番楽しい遊びです。

今年三月には奈路小を最後に退職された、地元出身の川村秀一教頭先生が、「子どもたちが使えるものを！」と、五十万円を寄付。そのお金で、たくさんの図書の他、トランポリンと一輪車四台も買うことができ、現在は計九台になりました。

休み時間になると、子どもたちは、外へ飛び出し一輪車乗りに夢中。五年生以上は、ほとんど上手に乗れるようになり、また体育の授業の中にも取り入れています。

川久保校長は、「狭い運動場ですので、遊具を取り付けることが難しく、いろいろ工夫してやっています。本当はやはり広い運動場で、遊ばせてあげたいですねえ」との事。

豊かな自然環境の中で、子どもたちみんなが、とても伸び伸び生き生きしていました。

日章小が市役所へ

4年生が親子一日研修

初めて上った屋上で勉強

六月二十七日、親子一日研修の行事として、日章小学校（小笠原巧校長、児童数三百九十五人）の四年生とその父母ら、約百三十人が市役所を訪れました。

今、四年生は社会科で、役所や清掃工場などの仕事について勉強しているので、実際に見て学ぼうと計画されたものです。

午後一時、到着した子どもたちは、まず市民課や議場を見学した後、屋上に集まって説明を聞きました。子どもたちは、それぞれメモをとったり質問したり、またお母さんがたの中にもメモをとる人もおり、親子で熱心に勉強。

その後、清掃工場と国分寺を訪ね、生きた教材で一日中楽しい屋外学習を行いました。